

羽村市の《協働》

「稲荷緑地の会」

減り続ける緑

植物は生物、特に人間を含めた動物にとつてはなくてはならない、生命維持の源の酸素を生み出していることは自明ながら、日頃緑を目にしたとき、どこまで想いをめぐらすことは、ほとんどありません。

しかし、一例を挙げると、1990年までの10年間に日本国土の4倍の熱帯雨林が消滅、身近な所では、羽村の保存樹林地が当初の119ヶ所から58ヶ所へと減り続けているのを見ると安閑とはできないでしょう。

緑の保全・拡大は 良い環境づくりの柱

私たちの生活にとって緑の果たす役割は酸素の供給源だけでなく、食料、木材、洪水防止機能、気温調整、緑による癒し効果など多岐にわたります。

稲荷緑地は、青梅から調布まで連なる多摩川の河岸段丘(通称立川崖線)の一部で、羽村一

中南端から羽村東小までの斜面を指し、かつては二次林として、コナラ、クヌギ、ケヤキなどの樹林地でしたが、手付かずのままではシロコ、アオキなどの雑木が生え広がり、人が踏み込むには困難な状況になっていました。

広げたい

「稲荷緑地の会」の活動

羽村市が都から使用許可を得た稲荷緑地を整備し、地元市民の人たちが自然とふれあう快適な場にしたと、隣接する町内会や企業、市と市民で協議を重ね、ボランティアの公募を開始したのが平成19年でした。

市民と行政との協働という市民活動の新しいスタイルでスタートし、月2回(金、土曜)の午前中の作業を10名程度で、これまで総計104回取り組んできました。

当初、稲荷緑地ではシロコなど多くの雑木を伐採し、遊歩道作り、在来種の植栽を進

めながら、適宜、市内の他の樹林地でも杉、松などの間伐や下草刈りなどもしてきました。整備後、園児の散歩コースになったり、見通しよく風の流れも気持ち良いなどの声を聞くとうれしくなります。また、資金的にも緑の募金からの助成を得て、用具などの充実を図っています。

今後の課題に

知恵と力を！

一応の整備ができた稲荷緑地を今後どのような姿にしていくべきか、地元の声を尊重しながら、衆知を集めていかなければなりません。

また、子供たちの手でドングリの苗を育て「私の樹」植樹や、ボランティア市民による街路樹の管理などが話題として出ています。そして立川崖線の各地の保全ボランティア団体との交流も今後、必要になって来ると思います。

「緑と花と水」の羽村が名実ともに充実するよう、多くの皆

さんの参加を呼びかけたいと思います。

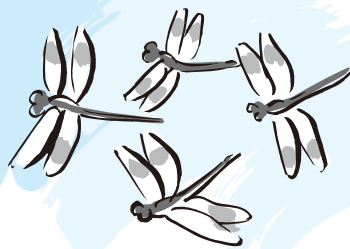
エピソードを募集しています！

市民活動センターでは、地域の「きずな」を育む活動事例やエピソードを募集しています。

いただいた情報は、順次この情報紙「きずな」でご紹介させていただきます。

どんなささいなことでもかまいません。

お気軽に市民活動センターまでご連絡ください。



今後の「きずな」の発行予定について

「きずな」は奇数月の15日(年間6回)に発行しています。「団体のひろば」に掲載を希望する団体は、各発行日の1カ月前までに市民活動センターへお申し込みください。(15日が休業日の場合、その前日が締切日になります。)なお、掲載は先着順となっておりますので、あらかじめご了承ください。